

国立国際医療センター広報誌

NCGM PRESS

Vol.18

HIDEYO MIYAZAKI

病院長

宮寄 英世

この冬はインフルエンザの大きな流行が続いています。2026年も、国立国際医療センターは感染症の動向を丁寧に見極めながら、地域の皆さま、そして国民の皆さまの健康を支える医療を着実に提供してまいります。



MASAYUKI HOJO

副院長(広報担当)

放生 雅章



● 今号ではこちらの内容を皆様にお届けします。

- 01 | 病院長インタビュー
- 02 | 医療の現場から：国際診療部
- 03 | クローズアップ！がん化学療法看護認定看護師

新体制から半年、

医療の質を高め続ける 国立国際医療センターのこれから



HIDEYO
MIYAZAKI

病院長

宮寄 英世

変わらぬ使命と、 確実に進むアップデート

新体制が始まって半年が経ちましたが、当院が担うべき使命そのものは変わりません。感染症をはじめとする健康危機に確実に対応するためには、平時から高度な臨床能力を維持し続けることが欠かせません。その意味では、統合の前後にかかわらず、当院の総合病院としての役割は揺らいでいません。むしろ、診療の力を確実に高め続けることが、J-IHSにおける当院の重要な責務だと考えています。

一方で、統合によって変化が生まれた部分もあります。例えば、感染症に関する情報の流れです。国立感染症研究所が担うサーベイランスの情報が、従来よりも直接的かつ迅速に当院へ届くようになりました。新たに立ち上がった感染症情報提供サイトでは、世界や国内の感染症動向が毎週更新されており、正確な情報をリアルタイムに社会へ届ける体制が整いつつあります。平時から正しい情報を届けることは、有事の際に信頼できる情報源として機能するための重要な積み重ねだと感じています。

また、災害派遣医療チーム（DMAT）事務局が機構に加わったことで、大規模災害を想定した訓練の質も一段と向上しました。普段は目に見えにくい部分ですが、緊急時に確実に対応できるよう、備えの体制を強化する取り組みは着実に進んでいます。

インタビュー記事全文はこちら！
<https://press.medigle.jp/doctor-interview/90.html>



がん治療の質を高めるのは、 設備と技術、そして“運用力”

今後さらに力を入れていきたいと考えているのが「がん医療の強化」です。

当院には現在、手術支援ロボットが2台稼働しており、CTを撮影しながら治療を進められるハイブリッド手術室も整備されています。手術用ロボットによりがん治療の精度と安全性が向上し、ハイブリッド手術室により病変の状態を即座に確認しながら手術できるため脳・心血管系手術の精度が大きく向上します。

ただし、設備が整っていれば高度な医療が自然と実現するわけではありません。ロボット手術やハイブリッド手術には、多くの職種が連携しながら関わる必要があります。手術室全体の運用がとても重要になります。どの手術をどの時間帯に配置するか、どのスタッフをどの手術にアサインするかといった管理体制が整って初めて、設備を最大限に活かした質の高い医療が実現します。

“安全性を確保しながら効率よく運用する仕組みそのもの”を強化していくことで、当院のがん医療をさらに進化させていきたいと考えています。



新任副院長のご紹介

生殖医療から低侵襲手術まで 横断する幅広い専門性

2025年10月には、産婦人科診療科長大石元先生が副院長に就任しました。大石先生は、生殖医療、更年期医療、周産期医療、婦人科腫瘍など、幅広い分野で経験を積まれてきた医師です。体外受精といった生殖補助医療に携わる一方で、子宮筋腫や子宮内膜症など、より複雑な病気に對しても、ロボット支援手術や腹腔鏡手術、経膈手術など、体への負担が少ない手術を多く行ってこられました。特に、癒着が強いケースにも対応できる技術を持っていることは、大きな強みだと感じています。

また、生殖医療を受けた方の中には、妊娠後にハイリスク妊娠として特別な管理が必要になる場合がありますが、大石先生は治療から妊娠、そして分娩までを一貫して診ていくことができます。生殖医療と手術医療を組み合わせ、妊娠・出産まで切れ目なく支えることができる医師は、全国的にもそう多くはありません。

副院長としては、先生の幅広い臨床経験に加えて、手術医療の運営面でも力を発揮していただけると期待しています。当院は手術支援ロボットやハイブリッド手術室を備えた手術集約型の総合病院であり、安全で効率のよい手術環境を整えるための運用の最適化が欠かせません。

大石先生には、手術室の運営や安全管理のさらなる強化をリードしていただけてと考えています。

大石先生は非常にエネルギーで、常に前向きな姿勢で取り組まれる方です。新しい視点を柔軟に取り入れながら、当院の手術医療をより発展させてくださると確信しています。

より安心して受診できる 病院を目指して

当院では、新たな基本方針として「患者さんを尊重した安全・安心の医療」「高度な総合診療」「医療人の育成」「地域医療への貢献」を掲げています。診療科や部門の間に大きな隔たりがなく、互いに協力しながら医療を進められることは当院の大きな強みです。この特長を活かし、これからも患者さんが安心して受診できる病院づくりに努めていきたいと考えています。

また、患者さんやご家族から寄せられるご意見は、毎週の病院会議で必ず確認しています。これまでも授乳室の設備改善、面会時間の見直し、個室をご利用の患者さんの動線調整など、いただいた声をもとに一つずつ改善を進めてきました。今後も、お気づきの点があればどうぞ遠慮なくお知らせください。

皆さまの声を受け止めながら、より良い病院を目指して取り組みを続けていきたいと考えています。



言葉や文化の壁を越え、
安心して受診できる医療を

CHIHAYA HINOHARA

国際診療部 部長

日野原 千速

国際診療部は、さまざまな国や地域の背景をもつ患者さんが安心して受診できるよう支える部門です。それと同時に病院スタッフがなるべくいつもと同じように医療が提供できるようにサポートする部門です。日本で暮らす方や旅行中の方など、それぞれの状況に合わせて、医療コーディネーターと医療通訳が医師と連携しながらきめ細かく対応しています。

新宿という地域で 必要な医療へ確実につなぐ支援

国際診療部は2015年4月に設立されました。この10年で新宿区の国際化は急速に進み、現在では住民の約14.5%、およそ7人に1人が外国籍の方です。観光客もコロナ禍後に大幅に増え、年間で一千数百万人が訪れています。当院は海外からの渡航者や在住者が多いエリアに位置しており、外国籍の患者さんも安心して受診できる体制づくりが年々重要になっています。

国際診療部では、日本に暮らす外国籍の方、旅行や出張で来日中に体調を崩された方、治療を目的に来日する方など、多様な背景をもつ患者さんを支援しています。健康保険の加入状況や滞在目的によって受診方法が異なるため、言語のサポートに加えて、日本の医療制度や受診方法の案内も行い、必要な医療にスムーズにつながるよう取り組んでいます。

治療計画が在留資格の内容や期限に左右されることもあります。たとえば、がん治療を始める時点で保険証の期限が残りわずかな場合は、治療の進め方を再検討する必要があります。最終的な治療方針は診療科が決めますが、国際診療部では患者さんの背景に合わせて説明や調整を行う役割を担っています。また、病気が原因で働けなくなるケースにおいては、就労ビザに影響があり、帰国を検討せざるを得ない場合もあります。透視治療が必要となった外国籍の方のケースでは、企業と連携し、生活と治療の両立について一緒に検討しました。職種や体調、企業の協力によっては、仕事と治療を両立できる場合もあります。このように、国際診療部では病状だけでなく、働く環境や在留資格など社会的背景にも寄り添いながら支援を行っています。

文化・食事への配慮などインタビュー記事全文はこちらから！
<https://press.medigle.jp/doctor-interview/89.html>



多様な状況に応える “対応力”と“専門性”

国際診療部には、医師、看護師資格を持つ医療コーディネーター、医療通訳、事務助手など多職種のスタッフが在籍しています。多国籍であり、留学経験や国際協力の経験を持つスタッフも多く、多言語対応に強い人材が揃っていることが特徴です。

医療コーディネーターは全員が看護師資格を持ち、診療現場と患者さんをつなぐ中心的な存在です。診療に同席した医療通訳から情報を受け取り、診療科との調整を行うなど、患者さんが安心して治療を受けられるよう支援しています。

外国籍の患者さんを受け入れる現場では、通常の病院では経験しにくい場面に直面することがあります。特に旅行中の方の入院は緊急性が高く、重い病状のまま帰国される場合や、不幸な転機を迎えることもあります。こうした際には、家族への連絡、帰国便の手配、旅行保険会社との調整など、医療以外の支援も必要です。医療コーディネーターは外部の企業や関連団体とも連携しながら、患者さんご家族を支える重要な役割を担っています。



“ことばの不安”を解消するために

診療において言葉の違いは、理解や意思決定に大きく影響します。当院では、言語が理由で患者さんが不利益を受けることがないよう、医療通訳の活用を積極的に進めてきました。現在では院内での利用が広く浸透し、安心して診療を受けられる体制の柱となっています。

英語・中国語・ベトナム語・ミャンマー語・ネパール語を担当する医療通訳が在籍し、新宿区で多い主要言語の多くをカバーしています。対応が難しい希少言語については、外部企業による遠隔医療通訳を組み合わせ、24時間体制で支援できるよう整えています。

医療通訳には、単に言葉を置き換えるだけでなく、患者さんの理解度に応じて表現を調整し、反応を見ながら正確に伝える高度なスキルが求められます。当院の医療通訳や協力企業の通訳者も、経験豊富なスタッフが揃っており、緊急時や重症なケースにも的確に対応できる体制が整っています。

これまで通訳費は病院が負担しておりました。しかしながら外国籍患者の受診が増え、医療通訳体制を維持するためのコストが高くなり、これまで病院負担としていた医療通訳料を2025年12月より患者さんに請求することとなりました。患者さんには理解を求めますが、患者さんの負担となります上、近隣及び連携している医療機関の先生方にも少なからず影響を与えることになるかと思えます。これまで以上に、地域の連携を図り、地域全体で外国人を含む住民の医療を支える働きかけにも努めたいと考えております。

多様な患者さんを地域で 支えるために

幼少期をカナダで、主夫としてイギリスで過ごした経験から、私は“自分がマイノリティとして暮らす状況”を体感してきました。母語ではない環境で医療を受けるときの不安や戸惑いは大きく、その経験はいま外国籍の患者さんに向き合う際の配慮につながっています。

現在の日本では、多国籍の方が急速に増える一方で、受け入れる側の体制が地域によって追いつかない場面もあります。患者さんは在留資格や保険制度など背景がさまざまで、医療機関の対応が意図せず差別と受け取られる可能性もあります。そのため、言葉の選び方や説明の仕方に細心の注意を払い、安心して診療を受けられる環境づくりを大切にしています。

新宿には現在130を超える国籍の方が暮らしており、当院には遠方から来院される患者さんも少なくありません。私たちは医療を提供するだけでなく、地域の医療機関が適切に対応できる環境づくりにも貢献したいと考えています。ご依頼があれば、医療機関向けのセミナーなどにも積極的に協力いたします。

地域によって状況は異なりますが、誰もが安心して医療につながれることが何より大切です。多様な背景を持つ方々が日本でも安心して暮らせるよう、地域とともにによりよい医療環境を築いていければと思っています。





心に寄り添い、支え続ける。

がん化学療法看護認定看護師が届ける支援

ATSUKO TSUKAHARA

看護部 副看護師長
がん化学療法(薬物療法)看護認定看護師

塚原 敦子

私は「がん化学療法看護認定看護師」として、患者さんが安心して治療を受けられるよう支援しています。「安全・安楽・確実に」をモットーに、治療中の体調の変化だけでなく、仕事や普段の生活への影響、外見の変化に伴う不安などにも寄り添い、その人らしい生活を大切にした看護を心がけています。がんとともに生きる患者さんが、より自分らしく前を向いて過ごせるよう、QOL(生活の質)の向上に努めています。また、治療は日進月歩で進化しています。その変化に対応できるよう日々学びを重ね、最新の知識に基づく安全で質の高いケアを提供しています。

患者さんの治療と日常を支える、 専門的なケア

外来治療センターでは、点滴や内服による抗がん剤治療を受ける患者さんが、自宅で有害事象(副作用)に適切に対処できるよう、セルフケア支援に取り組んでいます。同じ症状でも、生活への影響は患者さんによって大きく異なります。そのため、一人ひとりの症状や困りごとを対話を通じて丁寧に把握し、個性を踏まえた支援を大切にしています。外来では限られた時間の中で、症状やニーズを的確に把握し、必要に応じて医師へのフィードバックや薬剤師、メディカルソーシャルワーカーなど、多職種と早期から連携できる体制を整えています。患者さんのつらさや困りごとにいち早く気づき、専門性を生かした支援に繋がられるよう努めています。

有害事象への支援として、当院には複数の専門チームが活動しています。その一つであるアピアランスケアチームでは、がん治療や抗がん剤治療による外見の変化に対するサポートを行っています。近年は外来で治療を続けながら仕事や日常生活を送る方も増えており、外見の変化が、外出や社会参加の妨げとなることもあります。

当院では個別相談を実施しており、ウィッグの試着された患者さんが「自分の髪の毛みたい」「おしゃれを楽しみたい」と笑顔を取り戻された場面もありました。その方の思いに寄り添い、価値観に合わせた支援を大切にしています。

さらに当院では、国内でも早くから腫瘍循環器チーム(循環器内科医師、乳腺・腫瘍内科医師、臨床検査技師、薬剤師、看護師)を立ち上げ活動しています。一部の抗がん剤は心血管毒性があり、高血圧や不整脈、心機能の低下などのリスクが生じます。そのため、治療開始前から心機能の状態を評価し、必要に応じて早期に介入できる体制を整えています。今後は、治療後の長期的なリスクにも目を向け、治療と生活の両立を安心して続けていけるような支援に努めていきたいと考えています。

治療のそばで、 心にも寄り添う看護を

がん化学療法看護認定看護師として、身体・精神・社会面を含めた「全人的な支え」を大切にしています。患者さんとの会話の中で、表情やふとした言葉に耳を傾け、本音を安心して話していただける存在でありたいと考えています。がん治療は順調な時期だけでなく、つらい時期も訪れることがあります。気持ちが揺れることは、誰にとっても自然なことです。そのような時こそ患者さんに寄り添い、擁護者・代弁者として支えることを大切にしています。どのような治療を受けたか、どのように過ごしたいかなど、患者さんの価値観や治療の効果を踏まえた意思決定ができるよう、支援しています。

心に残っているのは、抗がん剤治療が長期に及び「治療する意味を見失った」と話された患者さんとの出来事です。リフレッシュに旅行へ行かれ、帰院された際には再び前向きな気持ちを取り戻した姿を拝見し、身体面や生活面に加えて、心理的なサポートがより重要であることをあらためて実感しました。現在の抗がん剤は、治療の進歩により治療期間が長期化しており、治療と生活を両立する中で、患者さんはさまざまな不安や戸惑いを抱えています。まずお伝えしたいのは、「ひとりで抱え込まなくて大丈夫」ということです。どんな小さなことでも気持ちを言葉にしてください。



専門性を深め、 患者さんを支え続けるために

がん化学療法看護認定看護師の資格取得には、看護師免許取得後5年以上に加え、がん薬物療法看護の実務経験が通算3年以上必要です。私が看護師になった当時は、抗がん剤による吐き気を抑える薬がまだ限られていました。患者さんの苦痛を少しでも軽減したい一心で、看護師としてできるケアを模索していた時代がありました。がん薬物療法を学び直し、根拠に基づく効果的なケアを提供したいという思いから、この資格取得を決意しました。資格取得から今年で16年。

患者さんから「副作用が楽になりました」「話を聞いてくれてありがとう。気持ちが楽になりました。」と言っていただけだった時に大きなやりがいを感じます。一方で、つらさを声に出せない患者さんも少なくありません。ニーズを汲み取り、言語化して多職種と共有することも、がん化学療法看護認定看護師の重要な役割です。これからも声なき声に耳を傾け、患者さんの想いを形にする支援を続けていきたいと考えています。



身近な存在として地域とつながり、医療に貢献したい

当院には、がん化学療法看護認定看護師が3名在籍しており、身近な専門職としてさまざまな場面で力を発揮したいと考えています。

治療の場合は、病院だけでなく在宅へと広がっています。治療の中断や重篤化を予防し、入院に至ることなく治療と生活の両立を実現するためには、地域で療養を支える医療機関の皆様との連携が欠かせません。患者さんが地域で安心して療養を続けられるよう、治療と生活を「点」ではなく「面」で支える体制と関係づくりに取り組んでいきたいと考えています。





人間ドックセンターのご案内

長い歴史をもつ当人間ドックセンターは、その歴史と経験に基づき、お客様からの安心と信頼をいただいております。その期待にお応えできるよう全スタッフが心を

込めてお迎えしております。施設内は広めのフロアでゆったりとしており、スムーズに検査を受けていただけることはもちろん、病院の専門診療科とも常に連携を取っており、ご病気が発見された際には、迅速に専門診療科へご紹介しております。また当院の特徴として、胃と大腸の内視鏡検査が同日に行えるコースや専門診療科とタイアップしたコース、PET-CT検査などの様々なオプション検査をご用意しており、皆さまの生活習慣や既往歴などに合わせて、ご自分でご自由にお選びいただけます。日帰りコースだけではなく、ご宿泊コースもご用意しており、お部屋からの夜景やお食事を楽しみながら、時間にゆとりをもって検査をお受けいただけます。



医学研究の発展と優れた人材の育成のために

当センターは、センター病院・国府台病院という2つの診療拠点に加え、研究所・臨床研究センター・国際医療協力局および国立看護大学校を擁し、高度総合医療を提供するとともに、特に感染症疫疾患ならびに糖尿病・代謝性疾患に関する研究・診療を推進し、これらの疾患や医療の分野における国際協力に関する調査研究および人材育成を総合的に展開しております。

当センターの活動を推進し、使命を十分に果たすためには、その活動財源を安定的・多面的に確保することが必要不可欠です。課せられたミッションを実現して国民の皆さまに成果を還元するための財源に関して、企業や個人の皆さまからの寄附によるご支援をお願いいたします。

何卒、当センターの寄附の趣旨にご理解頂き、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

患者支援アプリ導入のご案内

3月26日より、患者支援アプリ「Wellcne（ウェルコネ）」を導入しております。お手持ちのスマートフォンにインストールし、登録のお手続きをいただくことで、診察待ちの状況や、外来の予約の確認などができるようになります。

- ✓ 診察待ち順案内が届きます
- ✓ 受診予約が確認できます
- ✓ 医療情報の確認が可能となります。
- ✓ アプリ決済(後払い会計)が可能
- ✓ 院外処方箋の送信が可能です。



国立健康危機管理研究機構 国立国際医療センター

〒162-8655 東京都新宿区戸山1-21-1
TEL 03-3202-7181 <https://www.hosp.jihs.go.jp/index.html>



地下鉄を利用の方

都営地下鉄 大江戸線 若松河田駅(河田口)から徒歩5分
東京メトロ 東西線 早稲田駅(2番出口)から徒歩15分

都営バスをご利用の方

新宿駅から(宿74系統) 医療センター経由女子医大行き
「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分
大久保・新大久保から(橋63系統) 新橋行き
「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分
市ヶ谷・新橋から(橋63系統) 小滝橋車庫行き
「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分
都営飯田橋駅前(C1またはC3)から(飯62系統)
牛込柳町駅経由小滝橋車庫行き
「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分

診療時間

外来診療時間 8:30～17:15

初診受付 8:30～11:00

※休診日や完全予約制を設けている診療科もありますので、必ずホームページをご覧ください。

